公牘匯印全集

第二十四卷

谷崎潤一郎全集　第二十四卷

定價一五〇〇圓

昭和四十五年七月三十日初版
昭和四十五年十一月三十日再版

著者　谷崎潤一郎

發行者　山越　豐

印刷者　白井倉之助

發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

谷崎潤一郎全集　第二十四卷

目次

初期小品　一

狆の葬式　三

うろおぼえ　一八

死火山　二六

初期文章　三五

「學生倶樂部」第二號　三七

「學生倶樂部」第三號　四〇

「學友會雜誌」第三十五號　五三

「學友會雜誌」第三十六號　五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「少年世界」第八卷第一號　五四
「少年世界」第八卷第三號　五五
「學友會雜誌」第三十七號　五七
「少年世界」第八卷第八號　五九
「學友會雜誌」第三十八號　六〇
「學友會雜誌」第四十一號　六四
「學友會雜誌」第四十二號　七三
「學友會雜誌」第四十三號　八五
「學友會雜誌」第四十四號　九六
「學友會雜誌」第四十五號　一〇五
「校友會雜誌」第百六十四號　一一〇
「校友會雜誌」第百六十五號　一一三
「校友會雜誌」第百六十七號　一三九
「校友會雜誌」第百六十八號　一三二

「校友會雜誌」第百七十號　一三四
「校友會雜誌」第百七十一號　一三六
「校友會雜誌」第百七十二號　一三八
「校友會雜誌」第百七十三號　一四〇
「學友會雜誌」第五十一號　一四二

補遺

汽車の窓から　一五三
上方舞大會について　一五五
双葉會趣意書　一五九
奥村冨久子さんについて　一六二
座右において用の足せる一册本の辭書　一六三
リンディー　一六五
こんどの機會に　一六六

書簡　一六九
書簡補遺　七三五
書簡番號索引　七六一

初期小品

狆の葬式

明治四十年三月「校友會雜誌」（第一高等學校）第百六十五號

七月廿五日の朝五時、己は東京灣汽船會社に北村重七郎君の房州行を見送つて、采女町への歸路を俥で走らせた。

何しろ朝寢坊の男が其の日に限つて四時頃に他人から呼び醒されて、顏もろくに洗はず、飯も喰はずに飛出したのだから、未何だか眼瞼が張れぼつたい。口中では唾液がネチ〳〵する。どうかすると居睡が出るので兩手で眼を擦ると睫毛の端にザラ〳〵と眼脂が着いて居る。折柄の空はどんより曇つて、重々しい、下界に迫るやうに垂れ懸つた鼠色の雲が一面、斷目斷目には更に上の方に白雲が重つて見える。降雨の前兆であるのか曉から可厭に蒸暑く、懷の中迄湯氣を通されたやうである。汗襦袢と單衣との襟をキチンと緊めて着たので、尙更頸の周圍は燃え立つ程カツとする。いくら目を張つて力んで見ても、生暖い空氣が睡氣を催して、大川口にピーツと廣く、幽に、長々と響き渡る汽笛の聲を夢現の境に聞きながら、何時かとろ〳〵と前後不覺になつた。

突然車の心棒がガタンと鳴つて、泥隱しが一彈ね彈ねると、車が搖れて大きな自分の腰が一寸ばかり宙に浮いたのに、吃驚して眼を醒すと今しも車夫は高橋の袂を上るところ。節の多い凸凹の板の上を重さうに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俯向(うつむ)いて挽いて行く。左に開けた大川から暖いとも冷いともつかない、思切の悪さうな、齒痒いやうな軟風が、袂を孕まして、寢惚面を一と撫でして通る。途端に眼と口と鼻とを一所にしてハツクショーと嚏を一つすると、其れを合圖と心得たやうに、車がもう一度、節にあたつてドンと彈ねた。

矢張房州へ行くのであらう。向ふから元尾君の弟が俥を飛ばせて來て丁度橋の中央で逢つた。今頃何處へ行くかと云ふやうな顏で己を視て居たが、未語も交した事のない、ホンの顏だけ知り合つて居る仲の事だから、何も云はずに御辭儀をしようか、止さうかと思案の體宜しく行過ぎようとする。寢惚面をあまりヂツと眺められるので少し耻しくなつて、後れ馳せながらテレ隱れに帽子を取つて、首を下げると、不意討に面喰つて、あわてゝ先方も會釋しながら通り過ぎたのは聊可笑しかつた。下り際にもう一度思ひ切つて彈ねて、餘勢で車夫は一段速力を早めつゝ、まだ人通りの少い、靜な河岸通を左へ曲りかける。

ワン、ワン、ワンとけたゝましく吠えると云ふよりは叫ぶ聲――――其の時の聲は己の耳に確乎殘つて居て、今でも思ひ出せるが、人間ならば、熊谷堤にうら若い女坐頭が首を絞められながら、アレーツとでも叫ぶ時なのだらう。普通の犬のワンワンとは違つて、人間の殘酷と、我身の慘境とを天地に訴へる如き一種の悲鳴であつた。――――に其方を向くと、今曲らうとする角の家の前で、白い大きな犬がもがいて居る。ハツと思ふと其の背筋から頸のあたりを黑い棒が二三度閃めく。運惡くもがく拍子に隙をねらつて棒は見事に喉の骨をしたゝか打つた。犬はそれなりウンともスンとも云はず、體を横に、半ば仰向けに、四つの肢はもがいた瞬間の形を其儘、固くなつて往來へ斃れる。「可哀さうに」と云ひながら車夫も少し足を緩める。「ほつ、朝つぱらから好い仕事だ」と云ふ聲に氣が付くと、太筋立つた廣い額とギョロ〳〵怪しく輝

る眼の上へ、光澤のない髮の毛が蓬々と生ひ被さつた殘酷らしい男が居る。岩の塊の如き手に握つて居る樫の棒は、數百匹の犬の喉をつき破り、幾度かむごたらしい血の流れに染まつたのであらう、怨靈の念が凝つて固つて黑い罪惡の色に變つて居て見るも物悽い。犬殺し!!と云ふ感が俄に起る。實際今迄己は犬と棒との他には氣が付かないのであつた。見ると他に又怪しげな一人が車を挽いて來て「よし來た!」と云ひながら車の蔽ひの莚を一寸めくると前の男が犬の前肢二本を攫んで無雜作に莚の下へ投げ込んで了つた。其の時己は死顏を何の氣なしに窺ふと、瞳が坐つて悽くつるし上つた眼がヂツと己の方を睨みつけてゐるので、全身の血が一時に凍つたやうに總毛立つて思はず瞑目したが、胸の中は綿の塊のやうなものがもく〳〵と湧いて出て一種いやあな心持になつた。あゝ可忌なものを見たと思つたがもう仕樣がない。

きれいに掃除をした箒木の目が簾の如くについて居る地面の上を、苦悶の餘りひき搔いたらしい四肢の痕が永劫の恨を含んで縱橫に印されて居る外、一滴の血も出さず、彼は極めて洒つぱりした死方をしたのである。生物の命と云ふものが斯くも容易に絕たれる程脆いものかと思へば實に心細い。そしてまあの李が熟したやうに眞紅に充血して而も千萬無量の恨の色が何となくどんよりと赤濁りに濁つたあの眼はどうだらう。誰も嬲殺しになつた死體の物悽さは想像が出來ようが此の眼玉の恐しさは見なければ解らない。雪消の春の河水の勢で全身を走る血潮の流を一時に止められ、生々しい肉々をたゝかれ、花の盛の生命の精力を瞬時にもぎとられて、むざ〳〵と地の强い新しい美濃紙を橫にひきさくやうな、傷々しい最後を遂げた此の犬が、若し一と思ひに喉を打たれて殺されず、皮を破られ、骨を碎かれたなら、肢からも、胸からも、腹からも瀧津瀨をなして淋漓と流れるであらう全身の血の、迸出するに所なくして顏中の二點に逆

上したのである。方一寸にも足らぬ面積の中に人を戦慄せしむる程深刻な色を現はしたものがあるとすればそれは此の眼玉である。嵩の大きい石に打たれるより細い錐で突かれた方が痛いと同じに、滿身に現れた「悽絶なる最後」の恐ろしさより二點に集中した「慘死の怨」の方が遙に人をおびえさす。己は今たしかに錐で胸を突かれたのである。

あの眼はどうして己を睨んだらう。人間と云ふものは弱い獸を屠つて自分の懷を肥やす殘酷な動物だから、殺された以上は己の方から人間中の弱蟲に祟つていぢめてやらう。此の眼で睨んだが最後、一生其奴は己に呪はれたものと思へと草葉の陰から決心して居る所へ運惡く來合はせた己が注文通りの弱蟲であつたのだ。己は何處へ逐げて行つても到底あの眼玉を忘れる事は出來ない。飯を喰ふ時、便所へ行く時、寢床へもぐる時、夢を見る時、彼奴は執念深くついて廻るであらう。

恁う云ふ所を見ると熟々思ふが、己も他人に殺されたり、自殺したりするやうな苦しい最後はとげたくないものだ。とても死ぬなら暖い郡內の布團にくるまつて、清淨な純白のシーツの上で天井を見ながら嬉しい人に介抱されつゝ樂に往生したい。あの犬のやうに惡黨に追ひ廻されて、土の上を呻きながら逃げ走つて、悶え叫びつゝ空を摑み赤い目を出してキャツと云ひながら……あゝいやだ、いやだ、思つてもぞつとする。もう考へるのは止さう、止さうと思つたが矢張止せない、自分でそつと喉骨の高い所を觸つて見る。此處を打たれたらどんな具合か知らんと思つて一寸押して見る。急に緣起の惡い眞似をしたものだと心付くと、朝つぱらから恁んなものを見たり、自分でその眞似をしたりなぞするのも何か身にふりかゝる災難の前兆であらうと考へられてひどく心配になつて來た。

いつかもう俥は本願寺の傍を走つて居る。眼は全然冴えて睡氣なぞは疾うに飛んで行つて了つた。無神經な車夫は威勢よくガラ〳〵〳〵ツと采女橋を馳せ下りざま、一町程を瞬く間に驅けつて北村家の玄關へ俥をつける。己は始終此の北村家に宿つて居るのである。もう犬の事は忘れようと心で決めて閾を跨いだ。奥様はまだ寢て居る。女中は既に起きて臺所の釜の前でパチ〳〵と焚き付けて居た。

朝飯の膳に向ふと、赤いやうな、褐色のやうな味噌汁のどろ〳〵したのがどこか例の血の色に似て居る。ハツト思ふと二つの眼玉が碗の底から自分を睨みつける。困つたものだ、今日は終日こんな思をするのか知ら、今日ばかりならよいが長くつゞけば取殺されて了ふ。それでなくても今日中に己の命がなくなりさうな前兆があるからなるべく少しの危險にも近寄るまいとして居る所なのだ。

晝になつても飯が喰へない。然しもうあと半日無事にさへたてば此の一日は事なく濟むのだ。今から晩の十二時迄に己の身にふりかゝつて來る災難がなければ己も少しは安心が出來ようと思ふ。明日から外へ出てもなるべく犬を見ぬやうにするに限ると決心した。

それにつけて氣になるのは、實は北村の奥様は大の犬好で上等の牡の狆が一匹飼つてある。幸と此の頃は上野の別宅へつれて行かれて此家に居らぬからよいが、又ぢきに歸つて來るに違ない。己だとても今の今迄犬は大好であつた。小供の時分に大きな山犬に喰ひつかれた當坐は嫌になつたことはあるが、少したつたら再可愛いくなつて了つた。それでその狆も己とは大の仲好で、己の云ふ事なら何でも聽いて側へ寄つて來ては戯れたが、もうこれからは見るも嫌だ。若し狆が采女町へ歸つて來たらどうしよう。屹度狆の魂へ例の眼玉が乘り移つて己を惱ますに違ないのである。これ程心配しても、唯獨腹の中でやきもき思ふば

かりで誰にも話さなかつた。話したら男らしくもない憶病なと笑はれるに極つて居る。
十二時も過ぎて一時になつた、まづ今迄は何事もない、早く夕方になつて、薄暗くなつて、燈がついて、夜になつて、眞暗になつて、寢て了へばよいと思ふ。すると一時半頃牛乳屋の耕牧舍から奥様へ電話で「牝の狆の種のよいのが見當りましたが、御宅のと配合させては如何でございます。子供が生れたらば皆差上げても宜しうございます」と云つて來た。兼ねてより恰好な相手を搜して吳れと賴んで居た事だから奥様は大喜びで「それは何よりだから是非午後六時頃に采女町へ牝を連れて來て下さい、Hちやん（自家の狆の名）も其れ迄に上野から連れて來ますから」と答へてやる。あゝHちやんは歸つて來るのである。案の定災難の端緒が開かれた。犬の死顏が天井の隅の方で「それ見ろ、己の妄執の絆でHをこゝへ手繰りよせてやるわ」と云つて居るらしい。
「貴郎は犬が大好だし、Hちやんとはお馴染で、上野へつれて行く時も貴郎に願つたのだから、今日も一つ上野からHちやんと相乘りで歸つて來て下さいな。狆の媒介（なかうど）なんてちよいと洒落てるぢやありませんか」奥様は己の心も知らずに無殘にもこんな事を云ふ。何が洒落て居るものか。恐ろしや奥様の身にも眼玉が乘り移つて居るのであらう。
勿論己は二三度斷つたが狆は貴郎と一所でなければどうしても暴れて車へ乘らないのだから是非と賴まれる言葉に、己むを得ずとう〳〵行く事に承知した。抵抗すべからざる怨念の力が奥様と己との間に作用して居たのに違ない。
午後二時家を出て上野行の電車に乘つた。これから己は危險に近よりつゝ死地に赴くやうな氣がする、上

野の宅へついてHを見るだけでも一と通の苦勞ぢやない。氣の所爲か電車の中の乘客が皆犬面や狆面で、暗に己を嘲弄して居る如く見える。

着いて見ると南無三!!これは大變である。Hちゃんは此の間から心臟病を起して、毎日下谷の久保野と云ふ獸醫に診察してもらうて居るとの事であるが、今日はとりわけ容態が惡く、

「餘程危篤でございます。このやうな好い狆程、體質が弱く、殊に犬の斃れますのは多く心臟病でございますから、御用心なさい」と云はれたさうだ。成る程人間でも佳人は薄命で才子は多病と相場がきまつて居るから、Hちゃんも矢張其の佳狆薄命の方なのかと思ふと大に可哀さうである。平生ならば己を見ると飛んで來て、膝へ上つて、頰や、唇や、頰にキツスして、舌と舌とでなめ合ふのだが、今日は體を起す力もないらしい。女中に聽けば此の二三日來何も喰はずに水ばかり飲んで居るのだと云ふ。

眼玉の一件が再び猛烈に胸裡を騷がす。同時に「死にはしまいか?」と云ふ考が電光の如く心の奥でピカリと閃いたが、强ひて其の閃きを見まい見まいと心の內部に對して眼を閉ぢた。「御覽の通りでございますから、御婚禮は若旦那の御全快をお待ち遊ばしたらいかゞでございます。」と女中は笑ひながらそれでも氣づかはしげに云ふ。一應尤の說に取敢へず奥樣に電話で問ひ合はせると、少し位の病は關はぬから是非今夜と云ふ之はまた熱心な答に、已むを得ず支度をしかけるとHちやんの樣子が益惡く、他から見ても如何にも苦しさうになつた。「ねえ貴郎、こんなで連れて行つても宜しうございますか知ら」女中は頻に氣兼ねする。「それでは何卒醫者に問合はせてからになさりませ」と强ひられて據所なく電話で久保野に問合はせると、「どうして、どうして、あのやうに疲れて居る所を飛んでもない事」と返辭された。かう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com